

当時の日本では最も充実したドイツ語の教育機関であり、従ってそこで養成された彼の独語力は相当高度な域に達していたと判断される。シラーの作品を訳していることはその証拠になる。彼のすぐれた語学力は医学部本科へ進学してからも大いに役立ったであろうし、ひいてはその後の彼の出世にも貢献したのではあるまいか。

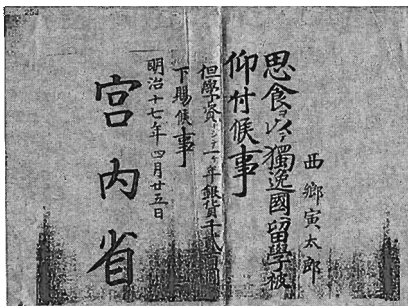
西郷寅太郎の留学

西郷寅太郎は1866年（慶応2）7月西郷隆盛の子として薩摩に生まれた。母は糸子といった。母違いの兄に後年初代京都市長となった西郷菊次郎がいる。ところで維新の最大の功臣であった西郷隆盛は明治10年の西南の役で破れ、一転して賊臣という汚名を着せられることになった。幼くして父と別れ、寅太郎は心寂しく鹿児島に長じ、明治11年4月西郷家の家督を相続した。この頃彼は、城山の麓の三州義塾において今藤白堂、東城鶴山に漢学を学び、岡源太郎に英学を学んでいた。

しかるにそんな寅太郎の元に、明治天皇の御手元金を以てドイツに留学させるとの知らせが宮内省から届いた。天皇は深く西郷南州翁の維新の大功を思い、その嗣子である寅太郎をドイツに留学させることを思い立ったのである。明治17年4月25日付の宮内省から西郷寅太郎に宛てた文書（鹿児島県立図書館蔵）には「思食ヲ以テ独逸国へ留学被仰付候事、但学資トシテ一ケ年銀貨千弍百円下賜候事」とあった。

一方『明治天皇記』の同年4月25日の条にはこの間の事情を次のように記してある。

「西郷寅太郎に独逸国留学を命じ、学費として一箇年金千二百円を賜ふ、寅太郎は西郷隆盛の嫡長子なり、隆盛の死後鹿児島に在り、謹慎して世に出ず、天皇深く隆盛の偉勲を追想し、其の心情を憐みたまひ、客年十二月侍講元田永孚をして旨を正四位吉井友実に伝えて、隆盛遺族の近情を問はしめたまひ、其の嗣子を招かしむ、友実人を遣はし、寅太郎をして上京せしむ、仍りて直に此の命を伝えさせたまふ」



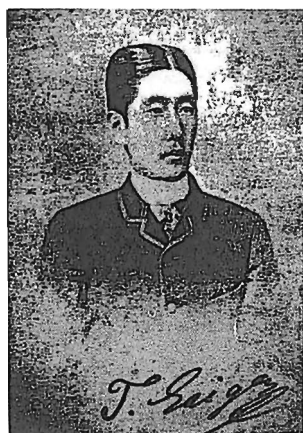
このようにして寅太郎は、天皇の御手元金によってドイツに留学するという全く破格の恩命に浴したのである。そして天皇は彼を留学準備のため東京に呼んだ。明治17年5月6日付で、寅太郎は東京滞在中の手当月々御下賜の沙汰を拝受した。かくして寅太郎は天皇の特別の思召しによって上京した。寅太郎の着京を聞くや、天皇は苦しからずとして直ちにそのまま参内させた。その時の寅太郎の恰好は鹿児島の兵児健児の風丸出しで、紺緋の

羽織に小倉袴という服装で参内し、天皇の龍眼を拝したと伝えられるが、これはまことに異数なことであった。そもそも寅太郎が拝謁の上、僅か三州義塾に学んだだけの身を以て天皇の御手元金によりドイツ留学をしたこと自体異例であった。東京に滞在中はドイツ語を学んだと考えられるが（当時鹿児島にはドイツ語を教える学校は存在しなかった）それがどこの独逸学塾

でなされたか残念ながら明らかでない。

ドイツ留学に出発したのは明治18年になってからであろう。いずれにせよ、この留学は彼の軍人としての生涯を決定した重要な出来事だった。

だがドイツ留学時代のことは、ポツダムにあるプロイセン陸軍士官学校を卒業し、同国歩兵少尉に任じ、晋国第6軍団第12師団第22旅団第32連隊付に補せられたということ以外詳しいことは明らかでない。大学に留学した場合は、現在それぞれの大学の文書館に学籍簿その他の資料が保存されているのが普通であり、それによって調査が可能である。だが、寅太郎のようにプロイセン陸軍士官学校など軍関係の学校に留学し、卒業後ドイツの軍隊に入隊した人の場合は、史料が散逸していて調査が困難である。ちなみに、『特別資料展・ドイツ兵士の見たNARASHINO』（平成12年）には18歳の時ポツダムで写したものと、25歳のドイツ士官学校時代のベルリンでの写真計2葉が収められている。いずれも若き日の寅太郎の姿を伝えていて興味深い。



西郷寅太郎
(18才の時、ポツダムで)

だがいずれにせよ、留学によって寅太郎はドイツ式軍隊教育を十分に受けたと見てよいであろう。当時は我が国の陸軍はそれまでのフランス式からドイツ式に代わる時期に当たっていたので、ドイツの軍人教育を身を以て体験した彼の存在は貴重であったろう。帰国後寅次郎は明治25年に陸軍少尉に任ぜられたが、日本の少尉になる前にプロイセンの少尉になっていたわけだ。

日清戦争の時は近衛第3連隊付き又歩兵55連隊に属し出征し、明治35年には父隆盛の偉勲により華族に列せられ侯爵を授けられた。大正5年には歩兵大佐に進み、第一次大戦の日独戦役にはドイツ通の故を以て千葉県習志野俘虜収容所の所長に任命された。貴族院議員でもあった。だが鹿児島新聞によると、寅太郎は大正7年11月頃より風邪気味で引き籠もり臥床中のところ、師走末より容態が陰しくなり種々手当をしたが甲斐なく、遂に1919年（大正8）1月元旦東京麻布の自宅で薨去した。53歳だった。墓は青山霊園にある。

五高初代ドイツ語教授 賀来熊次郎

賀来熊次郎は1860年（万延1）3月27日、現在の大大分県宇安心院町佐田に生まれた。父は惟寧といい村の素封家であった。賀来氏一族からは幕末から明治にかけて医者・本草学者・術衛家・興業家などすぐれた人物が輩出している。多くは帆足万里の門下であった。熊次郎の祖父賀来惟熊は、幕末明初の公益事業家として多大の功績があった人で、人となり剛毅果敢にして気節を重んじた。父を早く失った熊次郎はこの祖父の感化を受けて育った。初め漢学を学んだが、1871年（明治4）に豊津育徳館（翌年、行橋洋学校と改称）に入学し、蘭人カステールについて英語を学んだ。